

関係各位

京都府病虫害防除所長
(公 印 省 略)

病虫害発生予察情報について
下記のとおり発表しましたので送付します。

病虫害発生予報第6号(8月)

予報の概要

作物名	病虫害名	予想発生量 <平年比(前年比)>	作物	病虫害名	予想発生量 <平年比(前年比)>
イネ	いもち病(穂いもち)	<u>やや多</u> (やや少)	チャ	炭そ病	山城:並(多) 丹波: <u>多</u> (多) 丹後:並(並)
	紋枯病	<u>やや多</u> (やや多)		もち病	山城:並(並) 丹波:並(並) 丹後:並(並)
	セジロウンカ	やや少(やや少)		チャノコカクモンハマキ	山城: <u>やや多</u> (やや少) 丹波:やや少(少) 丹後:並(並)
	トビイロウンカ	並(並)		チャノホソガ	山城:やや少(並) 丹波: <u>やや多</u> (やや多) 丹後: <u>やや多</u> (やや少)
	ツマグロヨコバイ	やや少(少)		カンザワハダニ	山城:並(少) 丹波: <u>やや多</u> (やや少) 丹後:並(並)
	斑点米カメムシ類	<u>多</u> (多)		チャノミドリヒメヨコバイ	山城: <u>やや多</u> (やや少) 丹波:並(やや多) 丹後: <u>多</u> (並)
コブノメイガ	並(やや少)	チャノキイロアサミウマ	山城:やや少(並) 丹波: <u>やや多</u> (やや多) 丹後: <u>多</u> (並)		
黒大豆	吸実性カメムシ類	並(並)	野菜	果菜類 うどんこ病	並(やや少)
	サヤムシガ類	<u>多</u> (多)		キュウリ ベと病	<u>やや多</u> (多)
	ハスモンヨトウ	<u>多</u> (やや多)		キュウリ 褐斑病	並(やや多)
	ハダニ類	<u>やや多</u> (やや少)		キュウリ 炭そ病	<u>やや多</u> (やや多)
アズキ	ハスモンヨトウ	<u>多</u> (やや多)		トリカゴラシ・キュウリ	並(並)
	ハダニ類	<u>やや多</u> (やや少)		斑点細菌病	並(並)
ナシ	黒斑病	並(並)		野菜全般 ハダニ類	<u>多</u> (多)
	ハダニ類	やや少(やや少)		果菜類 ハモグリハエ類	やや少(並)
ブドウ	べと病	やや少(やや多)		果菜類 アサミウマ類	<u>やや多</u> (並)
	炭そ病	並(並)		ネギ ^{ネギ} アサミウマ	<u>多</u> (並)
カキ	うどんこ病	並(やや多)	ネギ ^{ネギ} ハモグリハエ	やや少(やや多)	
	うどんこ病	並(並)	野菜全般 シロイチモジヨトウ	<u>多</u> (並)	
カンキツ	ハダニ類	やや少(少)	野菜全般 ハスモンヨトウ	<u>多</u>	
	カメムシ類	山城:並 丹波:並 丹後: <u>やや多</u>			

目次

予報の概要	1
予報後注意	2
参考	18
I 予報の概要	19
II 予報の定義	19
III 予報の発表	20
IV 予報の発表の時期	21

予報本文

イネ

1 いもち病（穂いもち）

予報内容 発生量：平年比やや多い（前年比やや少ない）

予報の根拠

- (1) 7月中旬現在の発生量は、山城で平年比やや多く（+）、南丹で平年比やや少なく（-）、中丹で平年比少なく（-）、丹後で平年並。

	項目	本年	平年値
山城	発生ほ場率(%)	50.0	19.0
	発病株率(%)	10.7	3.5
	発病葉率(%)	2.7	1.4
南丹	発生ほ場率(%)	11.1	27.3
	発病株率(%)	5.8	15.5
	発病葉率(%)	1.4	4.7
中丹	発生ほ場率(%)	0.0	23.4
	発病株率(%)	0.0	6.1
	発病葉率(%)	0.0	1.7
丹後	発生ほ場率(%)	0.0	7.7
	発病株率(%)	0.0	1.8
	発病葉率(%)	0.0	0.5

- (2) 向こう1か月の気温は平年比高く、降水量は平年並または多く（+）、日照時間は平年並または少ない（+）と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 上位葉へ進展した葉いもちの病斑は、穂いもちの重要な伝染源となる。
(2) 穂ばらみから出穂後約3週間に、日照時間が少なく多雨多湿であると発生が多くなる。
(3) コシヒカリなど発病しやすい品種や、すでに葉いもちが多発している田、山間部などでは特に注意し、防除適期に薬剤防除を実施する。
(4) 粒剤は種類により施用時期が決まっているので、適期に施用する。
(5) カメムシとの同時防除剤を使用する場合は、出穂直前から穂揃期に散布する。
(6) 平成25年度に中丹地域、平成26年度に南丹地域の一部においてストロビルリン系薬剤（QoI剤）耐性菌の発生を確認した。耐性菌の発生地域ではいもち病に対するQoI剤の使用を中止し、他系統の薬剤（抵抗性誘導剤、MBI-R剤等）を使用する。QoI剤を使用したほ場で、防除効果の低下が疑われる場合は、他系統の薬剤で追加防除を行うとともに、速やかに病害虫防除所または、関係機関に連絡する。詳細は京都府病害虫防除所ホームページ（アドレス http://www.pref.kyoto.jp/byogai/documents/news20131113_1.pdf）を参照のこと。

2 紋枯病

予報内容 発生量：平年比やや多い（前年比やや多い）

予報の根拠

- (1) 7月中旬現在の発生量は、山城で平年比多く（+）、南丹で平年比やや多く（+）、中丹及び丹後で平年並。

	項目	本年	平年値
山城	発生ほ場率(%)	16.7	2.9
	発病株率(%)	1.3	0.1
	発病葉率(%)	0.3	0.0
南丹	発生ほ場率(%)	11.1	4.3
	発病株率(%)	0.4	0.3
	発病葉率(%)	0.4	0.1
中丹	発生ほ場率(%)	0.0	3.3
	発病株率(%)	0.0	0.1
	発病葉率(%)	0.0	0.0
丹後	発生ほ場率(%)	0.0	1.1
	発病株率(%)	0.0	0.0
	発病葉率(%)	0.0	0.0

(2) 向こう1か月の気温は平年比高く(+)、降水量は平年並または多く(+)、日照時間は平年並または少ない(+)と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 早植栽培で発生が多く、気温30℃前後で多湿条件が続くと多発する。
- (2) 例年発生の多いほ場や分けつの多いほ場では発生が多くなるので十分注意する。
- (3) 昨年多発したほ場では、深水管理をしない。
- (4) ~~出穂20日前の発病株率が20%以上であれば薬剤散布を行う。~~ 散布は発病部である葉鞘によく付着するように株元を狙って行うようにする。なお、穂いもちとの同時防除を考慮する。

3 セジロウンカ

予報内容 発生量：平年比やや少ない（前年比やや少ない）
予報の根拠

- (1) 7月中旬現在、本田見取り及び本田すくい取り調査の発生量は平年比やや少ない(-)。

本田見取り調査結果

項目	本年	平年値
発生ほ場率(%)	56.7	71.9
虫数(頭)	2.8	7.6

※本田25株見取り調査。

本田すくい取り調査結果

項目	本年	平年値
発生ほ場率(%)	26.7	50.1
虫数(頭)	0.5	8.8

※本田20回すくい取り調査。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 海外からの飛来害虫である。
- (2) 成幼虫とも吸汁加害するので、株当たり10頭以上の発生を認めた場合は防除する。なお、幼虫は株元に生息しているので、薬剤が株元までかかるよう丁寧に散布する。

4 トビイロウンカ

予報内容 発生量：平年並（前年並）
予報の根拠

- (1) 7月18日現在、予察灯への誘殺を認めていない。
- (2) 7月中旬の巡回調査では、発生を認めていない（平年並）。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 海外からの飛来害虫であり、~~今後発表される病害虫発生予察情報に注意する。~~
- (2) 株当たり5匹以上もしくは短翅虫を10株当たり2頭以上認めた場合は、直ちに防除する。この場合、薬剤が株元に十分かかるよう散布する。

5 ツマグロヨコバイ

予報内容 発生量：平年比やや少ない（前年比少ない）

予報の根拠

(1) 7月中旬現在、本田見取り及び本田すくい取り調査での発生量は平年比やや少ない（-）。

本田見取り調査結果

項目	本年	平年値
発生ほ場率(%)	26.7	36.2
虫数(頭)	0.7	2.7

※本田25株見取り調査。

本田すくい取り調査結果

項目	本年	平年値
発生ほ場率(%)	10.0	25.2
虫数(頭)	0.6	1.6

※本田20回すくい取り調査。

発生生態及び防除上注意すべき事項

(1) 穂ばらみ期から出穂期に高密度であると吸汁による被害が生じる。また、排泄物により、すす病が発生する。

6 斑点米カメムシ類

予報内容 発生量：平年比多い（前年比多い）

予報の根拠

(1) 7月中旬現在、本田での発生は平年比やや少なく（-）、畦畔雑草では平年比多い（+）。

	項目	本年	平年値
本田	発生ほ場率(%)	6.7	14.5
	虫数(頭)	0.1	0.3
畦畔	発生ほ場率(%)	63.3	47.9
	虫数(頭)	14.6	6.0

※20回すくい取り調査。

(2) アカスジカスミカメの予察灯への誘殺数は、京田辺市で平年比多く（+）、亀岡市で平年並、京丹後市で平年比やや多い（+）。

アカスジカスミカメ予察灯調査結果

場所	本年	平年値
京田辺市	13	1.4
亀岡市	44	32.8
京丹後市	110	95.4

※6月第1半旬～7月第3半旬までの合計誘殺虫数(頭)。

(3) アカヒゲホソミドリカスミカメの予察灯への誘殺数は、京田辺市で平年比やや多く（+）、亀岡市及び京丹後市で平年並。

アカヒゲホソミドリカスミカメ予察灯調査結果

場所	本年	平年値
京田辺市	42	21.0
亀岡市	24	43.7
京丹後市	58	89.7

※6月第1半旬～7月第3半旬までの合計誘殺虫数(頭)。

(4) 向こう1か月の気温は平年比高い（+）と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

(1) 稲穂を吸汁加害し、斑点米の原因となるカメムシ類には多くの種類がいるが、近年、カスミカメ類による被害が増加している。7

(2) 水田周辺のイネ科雑草の穂を餌にして増殖し、本田へ侵入するので、草刈りを行い、イネ科雑草の出穂を防ぐ。

- (3) 草刈りは出穂2～3週間前と出穂直前の2回行うと効果的である。1回で済ませる場合は、出穂10日前までに行う。なお、刈取り時期が遅れると逆効果になるので注意する。
- (4) 薬剤防除を行う場合、粉剤や液剤では穂揃期と傾穂期の2回防除（共同、一斉）が有効である。また、粒剤では種類により施用時期が決まっているので、適期に施用する。
- (5) 平成22年に、府内で初めてミナミアオカメムシの発生を確認した。本種は他の斑点米カメムシ類に比べて体が大きく吸汁量が多いため、少数でも被害が大きくなるので注意する。

7 コブノメイガ

予報内容 発生量：平年並（前年比やや少ない）

予報の根拠

- (1) 7月中旬現在、南丹地域で発生を認めている（平年並）。

項目	本年	平年値
発生ほ場率(%)	3.3	2.7
虫数(頭)	0.0	0.0

※本田25株見取り調査。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 海外からの飛来害虫である。
- (2) 晩植・多肥田やこれらの水口付近、生育の遅いイネに集中飛来するので注意する。

※今後注意すべきその他の病虫害等はp18を参照

黒大豆

1 吸実性カメムシ類

予報内容 発生量：平年並（前年並）

予報の根拠

- (1) 7月中旬現在、発生は認めていない（平年並）。

項目	本年	平年値
寄生株率(%)	0.0	0.4
虫数(頭/25株)	0.0	0.01

- (2) 7月第3半旬現在、予察灯(60W)への誘殺数は平年並。

種類	場所	本年	平年値
アオクサカメムシ	京田辺市	0	0.3
	亀岡市	0	0.2
	京丹後市	0	0.0
イチモンジカメムシ	京田辺市	0	0.2
	亀岡市	1	0.6
	京丹後市	0	0.3

*誘殺数(頭):6月第4半旬～7月第3半旬の合計値

- (3) 7月第3半旬現在、予察灯(BL20W)へのイチモンジカメムシの誘殺数は例年並。

場所	本年	平年値
京田辺市	0	1.3
亀岡市	0	0.9
京丹後市	2	1.0

*誘殺数(頭):7月第1半旬～第3半旬の合計値

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 吸実性カメムシ類には、アオクサカメムシ、イチモンジカメムシ、ホソヘリカメムシ、ブチヒゲカメムシ等がいる。

- (2) クズやレンゲ等の雑草が自生する場所は好適な発生地となりやすく、このような場所が周辺にある場合は、カメムシ類の被害を受けやすい。
- (3) 開花期直前から着莢期に成虫が飛来し、吸汁や産卵をする。成虫は好適な餌がある場所を求めて移動するが、幼虫はそのまま滞在し、黄熟期まで加害し続けるため、薬剤散布は着莢期から10日間隔で2～3回実施する。

2 サヤムシガ類

予報内容 発生量：平年比多い（前年比多い）

予報の根拠

- (1) 7月中旬現在、発生量は平年比多い（+）。

項目	本年	平年値
被害株率(%)	20.5	9.3
被害株数(株/25株)	8.8	3.1

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 年3～4回発生する。ダイズでは、7月下旬～8月中旬に第2世代幼虫が新芽を、8月下旬～9月に第3世代幼虫が莢を加害する。第2世代の方が被害が大きい。

3 ハスモンヨトウ

予報内容 発生量：平年比多い（前年比やや多い）

予報の根拠

- (1) 7月中旬現在、発生量は平年比多い（+）。

項目	本年	平年値
寄生株率(%)	0.5	0.0
虫数(頭/25株)	0.1	0.0
白変葉数(枚/10a)	0.0	0.0

- (2) 7月第3半旬現在、フェロモントラップへの誘殺数は平年比やや多い（+）。

場所	本年	平年値
京田辺市	115.0	104.4
亀岡市	245.4	120.8
京丹後市	210.0	160.6

*誘殺数(頭):6月第4半旬～7月第3半旬の合計値

- (3) 向こう1か月の気温は平年比高く（+）、降水量は平年並または多いと予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 発生は10月下旬頃まで続く。発生量は9月上中旬に最も多くなる。
- (2) 成虫は葉裏に数百個の卵を塊状に産みつける。卵塊は綿毛状のもので覆われ、卵粒は見えにくくなっている。ふ化した幼虫は若齢期（1～2齢）を集団で過ごし、葉の表皮を残して裏側を食害する。食害された葉は白く透けて見えることから白変葉と呼ばれ、発生初期の目安となる。
- (3) 齢が進んだ幼虫は周囲に分散し、かつ、薬剤の効力が著しく低下するので、ほ場を見回り白変葉の早期発見に努め、幼虫分散前の白変葉を取り除くとともに、薬剤散布を行い、初期防除に努める。

4 ハダニ類

予報内容 発生量：平年比やや多い（前年比やや少ない）

予報の根拠

- (1) 7月中旬現在、発生量は平年比やや多い（+）。

項目	本年	平年値
寄生株率(%)	1.0	0.5
虫数(頭/25株)	0.1	0.2

- (2) 向こう1か月の気温は平年比高く、降水量は平年並または多い（-）と予

想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 晴天で高温乾燥が続くと多発しやすくなる。特に7～8月の発生が多い。
- (2) 増殖が速く、高密度になってからでは防除効果が劣るので、初期防除に努める。

アズキ

1 ハスモンヨトウ

黒大豆の項参照。なお、ダイズに比べ白変葉が見つけにくいので注意する。

2 ハダニ類

黒大豆の項参照。

※今後注意すべきその他の病害虫等は p 18 を参照

果樹

1 ナシ 黒斑病

予報内容 発生量：平年並（前年並）

予報の根拠

- (1) 7月中旬現在、発生量は平年並。

項目	本年	平年値
発病葉率(%)	3.0	3.6

- (2) 向こう1か月の気温は平年比高く、降水量は平年並または多い(+)と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 収穫期に降雨が多い年は、袋掛けした果実でも、袋の口から雨水とともに分生子が流れ込み、発病することがある。
- (2) 夏から秋に掛けての葉での発生は、枝病斑や短果枝の病芽の発生を招き、翌年の感染源になる。落葉した発病葉も翌年の感染源になるので、防除を徹底する。特に、若い葉や枝のある徒長枝が発病しやすいので、薬剤散布は棚上の徒長枝にも薬液が掛かるように丁寧に行う。

2 ブドウ ベと病

予報内容 発生量：平年比やや少ない（前年比やや多い）

予報の根拠

- (1) 7月中旬現在、発生量は平年比やや少ない(-)。

項目	本年	平年値
発病葉率(%)	1.0	5.7

- (2) 向こう1か月の気温は平年比高く(-)、降水量は平年並または多い(+)と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 本病の発生適温は22～25℃である。雨が多く、気温が低めに経過する冷夏の年は多発しやすい。

3 カキ 炭そ病

予報内容 発生量：平年並（前年並）

予報の根拠

- (1) 7月中旬現在、発生を認めていない（平年並）。

項目	本年	平年値
発病果率(%)	0.0	0.0

- (2) 向こう1か月の気温は平年比高く、降水量は平年並または多い(+)と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

(1) カキノヘタムシガ、ハマキムシなどの食害部から発病することが多いので害虫防除も徹底する。

4 カキ うどんこ病

予報内容 発生量： 平年並（前年比やや多い）

予報の根拠

(1) 7月中旬現在、発生量は平年並。

項目	本年	平年値
発病葉率(%)	27.0	24.4

(2) 向こう1か月の気温は平年比高く（－）、降水量は平年並または多いと予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

(1) 本病の発生適温は15～25℃である。8月の高温時には病勢が治まるが、冷夏の年は分生子の飛散が続き、発病が続く。
(2) 8月下旬頃から発病した葉の裏側には、白い菌叢が見られる。

5 果樹全般 カメモムシ類

予報内容 発生量： 山城 平年並
丹波 平年並
丹後 平年比やや多い

予報の根拠

(1) 7月第3半旬現在、予察灯(BL)へのチャバネアオカメモムシの誘殺数は京田辺市、亀岡市で平年並、京丹後市で平年比やや多い（＋）。

場所	本年	平年値
京田辺市	3	62.5
亀岡市	2	2.2
京丹後市	41	26.7

※誘殺数：6月第4半旬～7月第3半旬の合計値

(2) 7月第3半旬現在、フェロモントラップへのチャバネアオカメモムシの誘殺数は京田辺市、亀岡市で平年並、京丹後市で平年比やや少ない（－）。

場所	本年	平年値
京田辺市	0.0	18.4
亀岡市	4.0	26.4
京丹後市	3.0	10.8

※誘殺数：6月第4半旬～7月第3半旬の合計値

(3) 7月第3半旬現在、予察灯(BL)へのクサギカメモムシの誘殺数は京田辺市、亀岡市で平年並、京丹後市で平年比多い（＋）。

場所	本年	平年値
京田辺市	2.0	5.3
亀岡市	1.0	0.5
京丹後市	22.0	3.3

※誘殺数：6月第4半旬～7月第3半旬の合計値

発生生態及び防除上注意すべき事項

(1) 果実被害は園により大きく異なる。特に、山林等の隣接園では注意する。スギ、ヒノキの球果の形成が少ない年は、果実の被害が多い傾向にある。
(2) 収穫期が近い果樹は、他の病虫害防除も含めて、農薬の使用にあたっては使用基準(特に収穫前日数)を厳守する。
(3) 合成ピレスロイド系薬剤を連用するとカイガラムシ類やハダニ類の発生が増えることがある。

6 ナシ・カンキツ ハダニ類

予報内容 発生量： ナシ 平年比やや少ない（前年比やや少ない）
カンキツ 平年比やや少ない（前年比少ない）

予報の根拠

(1) 7月中旬現在、発生量はナシ、カンキツともに平年比やや少ない(－)。

作物	項目	本年	平年値
ナシ	寄生葉率(%)	1.5	19.7
カンキツ	寄生葉率(%)	1.0	8.7

(2) 向こう1か月の気温は平年比高く、降水量は平年並または多い(－)と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

(1) 晴天が続くと多発しやすいので、園をよく見回り、発生を認めた場合には薬剤散布を行う。

(2) 年間世代数が多く、薬剤抵抗性がつきやすいので、同一系統の薬剤は連用しない。

チャ

1 炭そ病

予報内容 発生量：山城 平年並(前年比多い)
丹波 平年比多い(前年比多い)
丹後 平年並(前年並)

予報の根拠

(1) 7月中旬現在の発生量は、山城、丹後で平年並、丹波では平年比多い(+)

地域	項目	本年	平年値
山城	発病葉数(m ² 当たり)	0.1	0.6
	発生ほ場率(%)	5.3	16.2
丹波	発病葉数(m ² 当たり)	30.2	2.8
	発生ほ場率(%)	80.0	53.7
丹後	発病葉数(m ² 当たり)	0.3	0.6
	発生ほ場率(%)	33.3	27.5

(2) 向こう1か月の気温は平年比高く、降水量は平年並または多い(+)と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 伝染源は、摘採されずに残った前茶期の病葉である。
- (2) 本病が感染するのは新葉に限られ、新芽伸育期に降雨が続くと発生が多くなる。
- (3) 防除適期は、夏秋茶芽の第1～2葉展葉期である。

2 もち病

予報内容 発生量：山城 平年並(前年並)
丹波 平年並(前年並)
丹後 平年並(前年並)

予報の根拠

(1) 7月中旬現在の発生量は、山城で平年並、丹波、丹後では発生を認めない(平年並)。

地域	項目	本年	平年値
山城	発病葉数(m ² 当たり)	0.0	1.7
	発生ほ場率(%)	5.3	5.1
丹波	発病葉数(m ² 当たり)	0.0	0.0
	発生ほ場率(%)	0.0	0.0
丹後	発病葉数(m ² 当たり)	0.0	0.0
	発生ほ場率(%)	0.0	0.0

(2) 向こう1か月の気温は平年比高く(－)、降水量は平年並または多く(+)、日照時間は平年並または少ない(+)と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

(1) 病斑上に形成された担子胞子が風雨で飛散し、新芽に感染する。

- (2) 山間地で発生が多い。
 (3) 防除適期は、新芽伸育期である。

3 チャノコカクモンハマキ

予報内容 発生量：山城 平年比やや多い（前年比やや少ない）
 丹波 平年比やや少ない（前年比少ない）
 丹後 平年並（前年並）
 発生時期：第3世代幼虫ふ化期
 山城 8月第2～3半旬（平年比やや早い）
 丹波 8月第3～5半旬（平年並）

予報の根拠

- (1) 7月中旬現在、第2世代幼虫の発生量は山城で平年並、丹波で平年比少なく（-）、丹後では発生を認めていない（平年並）。

地域	項目	本年	平年値
山城	綴葉数（㎡当たり）	0.1	0.4
	幼虫・蛹数（㎡当たり）	0.1	0.2
	発生ほ場率（%）	5.3	7.8
丹波	綴葉数（㎡当たり）	0.2	4.0
	幼虫・蛹数（㎡当たり）	0.2	2.1
	発生ほ場率（%）	20.0	50.0
丹後	綴葉数（㎡当たり）	0.0	0.7
	幼虫・蛹数（㎡当たり）	0.0	0.3
	発生ほ場率（%）	0.0	2.5

- (2) 山城地域の一部で多発ほ場を認めている（+）。
 (3) フェロモントラップへの誘殺数は宇治市で平年比やや多く（+）、綾部市で平年比やや少ない（-）。
 (4) 第1世代成虫の発生時期は宇治市で平年比やや早く、綾部市で平年並。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 通常、4回世代を繰り返し、第2世代成虫が7月下旬～8月上中旬に発生し産卵する。
 (2) ふ化した幼虫は成長すると、葉を綴って食害するようになり、薬剤がかかりにくくなるので、ふ化直後の若齢幼虫期の防除が効果的である。
 (3) 近年、山城地域においてジアミド系及びIGR剤に抵抗性を発達させた個体群が確認された。そのため、これらの薬剤の効果が低いと感じられる場合は使用を中止し、他系統の薬剤を使用する。

4 チャノホソガ

予報内容 発生量：山城 平年比やや少ない（前年並）
 丹波 平年比やや多い（前年比やや多い）
 丹後 平年比やや多い（前年比やや少ない）
 発生時期：第4世代幼虫ふ化期
 山城 8月第3半旬～4半旬（平年比やや早い）
 丹波 8月第4半旬～5半旬（平年並）

予報の根拠

- (1) 7月中旬現在、第3世代幼虫の発生量は山城で平年比やや少なく（-）、丹波、丹後で平年並。

地域	項目	本年	平年値
山城	寄生芽率（%）	0.3	8.8
	巻葉数（㎡当たり）	0.1	1.1
	発生ほ場率（%）	10.5	47.2
丹波	寄生芽率（%）	0.0	2.7
	巻葉数（㎡当たり）	0.0	0.6
	発生ほ場率（%）	0.0	36.0
丹後	寄生芽率（%）	18.7	19.3
	巻葉数（㎡当たり）	0.0	5.2
	発生ほ場率（%）	66.7	61.1

- (2) フェロモントラップへの誘殺数は宇治市で平年比やや少なく（-）、綾部

市で平年比やや多く（＋）、京丹後市では過去3年の値と比較して多い（＋）。

（3）第2世代成虫の発生時期は宇治市で平年比やや早く、綾部市では平年並。

発生生態及び防除上注意すべき事項

（1）通常、5回世代を繰り返し、第3世代成虫が8月上中旬に発生し産卵する。

（2）卵は3～7日でふ化し、新芽を加害する。

（3）弧状仕立て園の防除適期は、夏秋茶芽の第2葉開葉期である。

5 カンザワハダニ

予報内容 発生量：山城 平年並（前年比少ない）
丹波 平年比やや多い（前年比やや少ない）
丹後 平年並（前年並）

予報の根拠

（1）7月中旬現在、発生量は山城、丹後で平年並、丹波では平年比やや多い（＋）。

地域	項目	本年	平年値
山城	寄生芽率（％）	2.5	2.3
	寄生虫数（100葉当たり）	5.7	4.2
	発生ほ場率（％）	45.0	28.0
丹波	寄生芽率（％）	5.3	3.7
	寄生虫数（100葉当たり）	11.0	14.4
	発生ほ場率（％）	66.7	38.0
丹後	寄生芽率（％）	0.5	2.9
	寄生虫数（100葉当たり）	0.5	11.2
	発生ほ場率（％）	25.0	48.3

（2）向こう1か月の気温は平年比高く、降水量は平年並または多い（－）と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

（1）晴天が続くと多発しやすいので注意する。

（2）繁殖力は10～30℃の範囲で高温の時ほど高いが、降雨により増殖が抑制される。

6 チャノミドリヒメヨコバイ

予報内容 発生量：山城 平年比やや多い（前年比やや少ない）
丹波 平年並（前年比やや多い）
丹後 平年比多い（前年並）

予報の根拠

（1）7月中旬現在、発生量は山城、丹波で平年並、丹後では平年比多い（＋）。

地域	項目	本年	平年値
山城	寄生・被害芽率（％）	4.4	5.0
	発生ほ場率（％）	57.1	40.9
丹波	寄生・被害芽率（％）	5.0	7.0
	発生ほ場率（％）	100.0	45.0
丹後	寄生・被害芽率（％）	20.0	0.9
	発生ほ場率（％）	100.0	11.1

（2）病害虫調査協力員から、山城地域の一部で多発園を認めているとの情報が寄せられている（＋）。

発生生態及び防除上注意すべき事項

（1）主に新梢を加害し、新芽の被害症状は黄化、萎縮、葉先の褐変、黒変等である。

（2）防除適期は、新芽伸育期である。

（3）ネオニコチノイド系、有機リン系などの薬剤に対する感受性が低下している地域があるので、同一系統の使用を避ける。

7 チャノキイロアザミウマ

予報内容 発生量：山城 平年比やや少ない（前年並）
 丹波 平年比やや多い（前年比やや多い）
 丹後 平年比多い（前年並）

予報の根拠

(1) 7月中旬現在、発生量は山城で平年比やや少なく（－）、丹波で平年比やや多く（＋）、丹後では平年比多い（＋）。

地域	項目	本年	平年値
山城	寄生・被害芽率（％）	37.7	45.4
	発生ほ場率（％）	100.0	98.2
丹波	寄生・被害芽率（％）	17.0	12.7
	発生ほ場率（％）	100.0	78.2
丹後	寄生・被害芽率（％）	54.7	9.2
	発生ほ場率（％）	100.0	72.7

(2) 向こう1か月の気温は平年比高く（＋）、降水量は平年並または少ない（－）と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 主に二番茶以後に増加し、夏秋茶芽を吸汁加害する。
- (2) 多雨により発生は減少するが、生息密度が高い場合は注意する。
- (3) 発生が多い園では、夏秋茶芽の萌芽期と第1葉開葉期に2回防除を行うと効果が高い。
- (4) 薬剤の使用に当たっては、同一系統の使用を避ける。
- (5) ネオニコチノイド系、合成ピレスロイド系などの薬剤に対する感受性が低下している地域があるので、同一系統の使用を避ける。

※今後注意すべきその他の病虫害等はp18を参照

野菜

1 果菜類 うどんこ病

予報内容 発生量：平年並（前年比やや少ない）

予報の根拠

(1) 7月中旬現在、トウガラシでは発生を認めず（例年並）、キュウリ、ナスでの発生量は平年並。

作物	項目	本年	平年値
トウガラシ	発病株率（％）	0.0	0.0
キュウリ	発病株率（％）	4.3	9.2
ナス	発病株率（％）	0.3	1.1

(2) 向こう1か月の気温は平年比高く（＋）、降水量は平年並または多いと予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 施設栽培で発生しやすく、高温乾燥が続くと発生が多くなる。
- (2) 窒素肥料の過用を避け、茎葉が繁茂し過ぎないようにする。
- (3) トウガラシ類では、ハダニ類による被害と判別が難しいので、被害葉を十分に観察する。
- (4) 菌糸が組織内で増殖するので、薬液が十分付着するよう丁寧に散布する。

2 キュウリ ベと病

予報内容 発生量：平年比やや多い（前年比多い）

予報の根拠

(1) 7月中旬現在、発生量は平年比やや多い（＋）。

項目	本年	平年値
発病葉率(%)	38.7	20.6
発生ほ場率(%)	0.0	49.5

(2) 向こう1か月の気温は平年比高く(－)、降水量は平年並または多い(＋)と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 病原菌は、多湿条件で侵入、まん延しやすい。
- (2) 肥切れしたり草勢が衰えると発生が多くなるので、肥培管理に注意する。

3 キュウリ 褐斑病

予報内容 発生量：平年並(前年比やや多い)

予報の根拠

- (1) 7月中旬現在、発生を認めていない(平年並)。

項目	本年	平年値
発病葉率(%)	0.0	0.0
発病株率(%)	0.0	0.1

(2) 向こう1か月の気温は平年比高く、降水量は平年並または多い(＋)と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 発病適温は25～30℃で、高温多湿条件下で多発する。
- (2) 一度発生したほ場では、毎年発生がみられることが多い。
- (3) 施設栽培では換気を十分に行い、かん水も過多にならないようにし、高温多湿に注意する。
- (4) 窒素質肥料の過多は耐病性を低下させ、一方、肥料切れや成り疲れによる草勢の衰えは発病を助長するので、適正な肥培管理に努める。
- (5) 被害葉上の胞子は乾燥状態では相当長く生存するので、被害葉は土中深く埋めるか焼却処分する。

4 キュウリ 炭そ病

予報内容 発生量：平年比やや多い(前年比やや多い)

予報の根拠

- (1) 7月中旬現在、発生量は平年比やや多い(＋)。

項目	本年	平年値
発病葉率(%)	1.0	1.4
発病株率(%)	10.7	4.1

(2) 向こう1か月の気温は平年比高く(－)、降水量は平年並または多い(＋)と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 気温22～24℃で降雨が続くと伝染、まん延しやすい。発病後の防除は効果が劣るので、予防、早期防除に重点を置く。
- (2) 種子伝染するほか、被害作物の残さ、資材等が伝染源となる。
- (3) 窒素質肥料の多用は発病を助長するので注意する。

5 キュウリ・トウガラシ 斑点細菌病

予報内容 発生量：平年並(前年並)

予報の根拠

- (1) 7月中旬現在、キュウリで発生を認めていない(平年並)。

項目	本年	平年値
発病葉率(%)	0.0	0.0
発病株率(%)	0.0	0.0

(2) 向こう1か月の気温は平年比高く(－)、降水量は平年並または多い(＋)と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 降雨等により病原細菌が飛散し、果実及び葉の気孔等から入って発病する
場合が多い。
- (2) 曇雨天が続くと急速にまん延するので、気象の変化に注意する。
- (3) 多湿が発病を助長するので、施設では換気を十分に行う。
- (4) 発生してからでは防除が困難となるので、予防防除に努める。

6 野菜全般 ハダニ類(チャノホコリダニを含む)

予報内容 発生量：平年比多い(前年比多い)

予報の根拠

- (1) 7月中旬現在、発生量はキュウリでは平年比多く(＋)、ナスでは平年比
やや多く(＋)、トウガラシでは例年並。

作物	項目	本年	平年値
キュウリ	寄生虫数(頭/葉)	1.04	0.11
	寄生葉率(%)	22.3	2.6
ナス	寄生虫数(頭/葉)	4.19	0.28
	寄生葉率(%)	14.0	2.2
トウガラシ	寄生株率(%)	2.0	5.1

(2) 向こう1か月の気温は平年比高く、降水量は平年並または多い(－)と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 主に葉裏に生息し、乾燥条件で発生しやすい。
- (2) 薬剤が葉裏や生長点にかかるよう丁寧に散布する。
- (3) ハダニ類は薬剤に対する抵抗性が生じやすいので注意する。
- (4) 雨よけ栽培では発生しやすいので十分注意し、発生初期の防除に留意する。
- (5) ハウス内及びほ場周辺の除草を徹底する。

7 果菜類 ハモグリバエ類

予報内容 発生量：平年比やや少ない(前年並)

予報の根拠

- (1) 7月中旬現在、キュウリでの発生は平年比少なく(－)、ナスでは平年比
やや少ない(－)。

作物	項目	本年	平年値
キュウリ	被害葉率(%)	0.0	5.3
	発生ほ場率(%)	16.7	84.0
ナス	被害葉率(%)	0.1	3.6
	発生ほ場率(%)	42.9	47.0

(2) 向こう1か月の気温は平年比高く(＋)、降水量は平年並または多いと予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) トマトハモグリバエは、8月以降多発する傾向がある。
- (2) 苗からの持ち込みを防ぎ、被害植物の残さは土中に埋めて処分する。施設

- 栽培では、開口部に0.8mm目合いの防虫ネットを張る。
 (3) 黄色粘着ロールをハウス周囲及び開口部に展張する。
 (4) 発生を認めたら被害葉を取り除き、発生初期の防除に留意する。
 (5) 施設マルチ栽培では、マルチ上に落ちた蛹を掃き集めて処分する。

8 果菜類 アザミウマ類

予報内容 発生量：平年比やや多い（前年並）

予報の根拠

- (1) 7月中旬現在、発生量はキュウリででは平年比やや多く（+）、ナスでは平年並、トウガラシでは発生を認めている。

作物	項目	本年	平年値
キュウリ	寄生虫数（頭／葉）	2.01	0.76
	寄生葉率（%）	40.7	18.5
ナス	寄生虫数（頭／葉）	0.02	0.05
	寄生葉率（%）	1.7	3.3
トウガラシ	寄生花率（%）	49.0	—

- (2) 向こう1か月の気温は平年比高く（+）、降水量は平年並または多い（-）と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) アザミウマ類には直接加害するだけでなく、ウイルス病を媒介する種（ミカンキイロアザミウマ、ネギアザミウマ等）もいる。
 (2) ハウスや雨よけ栽培では、高温乾燥が続くと特に多発しやすいので、注意する。
 (3) ハウス内及びほ場周辺の除草を徹底する。

9 ネギ ネギアザミウマ

予報内容 発生量：平年比多い（前年並）

予報の根拠

- (1) 7月中旬現在の発生量は平年比やや多い（+）。

項目	本年	平年値
被害株率（%）	85.3	52.7
被害度	21.3	21.2

- (2) 向こう1か月の気温は平年比高く（+）、降水量は平年並または多い（-）と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 年間、10世代以上くり返し、葉の表層を食害し、かすり状の食害痕を残す。ネギでは葉鞘分岐部や葉折れの内側に多く寄生する。
 (2) 本種は府内各地で発生が問題となっているネギえそ条斑病を媒介する。
 (3) ネギえそ条斑病は、アイリス黄斑ウイルス（Iris yellow spot virus: IYSV）による病害で、本病の防除にはネギアザミウマに対する薬剤散布や、防虫ネットやUVカットフィルムによる物理的防除が効果的である。
 (4) 被害葉及び収穫残さが本虫の発生源となるので、残さは一箇所にとめて積み上げ、表面をビニルで被覆する等適切に処分する。
 (5) 本種は、殺虫剤感受性低下が懸念されている。殺虫剤散布後は効果を十分に確認し、感受性の低下が疑われる場合は系統の異なる薬剤を散布する。また、感受性の低下を避けるため、系統の異なる殺虫剤をローテーション散布する。
 (6) 新系統（産雄性生殖系統）と在来系統の殺虫剤感受性は異なるので、新系統の発生を確認している地域（山城及び南丹地域）では注意する。

詳細は平成29年3月27日付け「防除所ニュース平成29年第3、4号」参照。

10 ネギ ネギハモグリバエ

予報内容 発生量：平年比やや少ない（前年比やや多い）

予報の根拠

（1）7月中旬現在、発生量は平年比少ない（－）。

項目	本年	平年値
被害株率(%)	2.7	61.8
被害度	0.7	22.3

（2）山城地域の一部で多発ほ場を認めている（＋）。

（3）向こう1か月の気温は平年比高く（＋）、降水量は平年並または多いと予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

（1）幼虫が葉肉部分を加害し、白い筋状の食害痕を残す。

（2）産卵から羽化までの発育所要日数は20℃で約36日、25℃で約23日程度である。

（3）被害葉及び収穫残さが本種の発生源となるので、残さは一箇所にまとめて積み上げ、表面をビニルで被覆する等適切に処分する。

11 ネギ シロイチモジヨトウ

予報内容 発生量：平年比多い（前年並）

予報の根拠

（1）7月中旬現在、発生量は平年比多い（＋）。

項目	本年	平年値
幼虫数(頭/株)	0.04	0.001
寄生株率(%)	4.0	0.1
発生ほ場率(%)	25.0	2.5

（2）7月第3半旬現在、京田辺市のフェロモントラップへの誘殺数は平年（平成18～26年の平均値）を大きく上回っている（＋）。

場所	本年	平年
京田辺市	27.4	8.2

※ 誘殺数(頭)は6月第4半旬～7月第3半旬の合計値
平年：平成18～26年の平均値

（3）向こう1か月の気温は平年比高く（＋）、降水量は平年並または多いと予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

（1）本種は齢が進むと、薬剤の効力が低下するので、ほ場をこまめに観察して早期発見に努め、若齢期の防除を徹底する。

（2）被害葉及び収穫残さが本種の発生源となるので、残さは一箇所にまとめて積み上げ、表面をビニルで被覆する等適切に処分する。

12 野菜全般 ハスモンヨトウ

予報内容 発生量：平年比多い

予報の根拠

（1）7月第3半旬現在、フェロモントラップへの誘殺数は平年比やや多い（＋）。

場所	本年	平年値
京田辺市	115.0	104.4
亀岡市	245.4	120.8
京丹後市	210.0	160.6

* 誘殺数(頭): 6月第4半旬～7月第3半旬の合計値

(2) 向こう1か月の気温は平年比高く(+)、降水量は平年並または多いと予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 1枚の葉に数百個の卵を塊状に産みつけ、ふ化した幼虫は若齢期(1～2齢)を集団で過ごし、葉の表皮を残して裏側を食害する。食害された葉は白く透けて見えることから白変葉と呼ばれ、発生初期の目安となる。
- (2) 齢が進んだ幼虫は周囲に分散し、かつ、薬剤の効力が著しく低下するので、ほ場を見回り白変葉の早期発見に努め、幼虫分散前の白変葉を取り除くとともに薬剤散布を行い、初期防除に努める。

※今後注意すべきその他の病虫害等はp18を参照

今後注意すべきその他の病害虫等

イネ

1 アワヨトウ

- (1) 6月下旬～7月上旬にかけて丹後地域のイネ、飼料作物などで多く発生し、幼虫による被害が確認されている。
- (2) 7月下旬から次世代幼虫が多発することが予想されるので、ほ場及びその周辺での発生に注意する。
- (3) 発生を認めた場合には、薬剤散布を行い幼虫の水田への侵入を防ぐ。
- (4) 詳細については、平成29年防除所ニュース第6号を参照のこと。
(<http://www.pref.kyoto.jp/byogai/documents/h29news6awayotou.pdf>)

2 白葉枯病

- (1) 暴風雨などが予想される時は、深水にするなど極力葉の損傷を少なくするよう努める。
- (2) 窒素肥料の多用を避けるほか、露や濡れ葉状態の時にはほ場に入らないなど注意する。

3 フタオビコヤガ（イネアオムシ）

- (1) 山間・山沿い地域や集落周辺など、風通しの悪い水田で多発しやすく、また、曇雨天が多い年に発生しやすい。
- (2) 出穂前後に発生する世代の加害が多いと被害が出る場合がある。幼虫が4、5齢に成長すると摂食量が増加するため、被害が急激に拡大するので注意する。

4 ニカメイガ（ニカメイチュウ）

- (1) 発蛾最盛期は通常、8月第4半旬である。
- (2) 第1世代幼虫による被害が目立ったほ場、茎の太い品種やモチの作付田では発生しやすい。
- (3) 野菜・チャ・イチジク等の栽培で稲わらを使用する地域では、発生しやすいので注意する。

アズキ

1 アズキノメイガ、マメノメイガ、サヤムシガ類、オオタバコガ

- 発生すると被害が大きく、莢に食入すると防除が難しいので、開花始めから7～10日間隔で少なくとも2回は防除を行う。

チャ

1 チャトゲコナジラミ

本種の農薬による防除適期は若齢幼虫期（8月第1～2半旬）である。成虫期の散布では密度抑制効果が不十分であるため、成虫の飛翔が落ちついた頃を見計らって薬剤散布を行う。

野菜

1 ネギえそ条斑病

7月中旬の巡回調査では、発生を確認している。今後も引き続き本病の発生に注意する。

2 オオタバコガ、タバコガ

7月第3半旬現在、オオタバコガ及びタバコガのフェロモントラップへの誘殺数は平年比やや少ない～平年並であるが、これらの害虫は発生が多くなると、大きな被害になるので注意する。特に、ナス、トマト等の果実に食入すると、薬剤の効力が低下するので、早期発見に努め、食入前の防除に留意する。

3 カメムシ類（トマト、ナス、トウガラシ、インゲン等）

周囲に雑草地やダイズなどカメムシ類の発生しやすいほ場があると、被害を受けやすいので、早期発見に努める。

平成22年に府内で初めて発生を確認したミナミアオカメムシは、本年も京田辺市の予察灯で誘殺を確認するとともに、7月中旬の巡回調査でも、山城地域のナスほ場で発生を確認している。本種はナス、トマト等の果実を加害するので注意する。

参 考

I 近畿地方 1 か月予報（7月22日から8月21日までの天候見通し）

平成29年7月20日
大阪管区气象台発表

＜予想される向こう1か月の天候＞

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。
 平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。

向こう1か月の平均気温は高い確率50%です。降水量は、平年並または多い確率ともに40%です。日照時間は、平年並または少ない確率ともに40%です。
 週別の気温は、1週目は、平年並の確率50%です。2週目は、平年並の確率50%です。3～4週目は、平年並または高い確率ともに40%です。

＜向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率（%）＞

	低い(少ない)	平年並	高い(多い)
気 温	10	40	50
降 水 量 (近畿日本海側)	20	40	40
降 水 量 (近畿太平洋側)	20	40	40
日 照 時 間 (近畿日本海側)	40	40	20
日 照 時 間 (近畿太平洋側)	40	40	20

病虫害防除所では上記の天候の1か月予報の表現を「向こう1か月の気温は平年比高く、降水量は平年並または多く、日照時間は平年並または少ないと予想されている」としました。

II 用語の定義

1 半旬のとり方

第1半旬
第2半旬
第3半旬
第4半旬
第5半旬
第6半旬
 各月の 1～5日 6～10日 11～15日 16～20日 21～25日 26～最終日

2 発生量 — — — 病虫害の発生程度と広がり的一面を加味したものをいう。

3 平年値 — — — 原則として過去10か年の平均とする。
 データが10年に満たない場合は例年値とする。

4 平年値との比較

1) 時期

平年並	平年値を中心として前後2日以内
やや早い	平年値より3～5日早い
やや遅い	平年値より3～5日遅い
早い	平年値より6日以上早い
遅い	平年値より6日以上遅い

2) 量（発生量、発生面積等）

平年並	平年値並の発生で10年間に4回は発生する程度の普通の量
やや多い	「平年並」より発生が多く、10年間に2回程度の頻度で発生する量
やや少ない	「平年並」より発生が少なく、10年間に2回程度の頻度で発生する量
多い	「やや多い」より多く、10年間に1回程度しか発生しない量
少ない	「やや少ない」より少なく、10年間に1回程度しか発生しない量

Ⅲ 予報本文の見方

「予報本文」の見方をチャノコカクモンハマキを例に示します。

1 チャノコカクモンハマキ

予報内容 発生量：山城 平年比やや多い（前年比やや多い）
 丹波 平年並（前年並）
 丹後 例年並（前年並）

- ・「予報内容」は、今後の病害虫発生状況や発生時期の予測を平年比で示しています。
- ・平年比の見方は、「Ⅱ 用語の定義、4 平年値との比較」を参照してください。
- ・（ ）内の前年比は予想月の前年の発生量（時期）との比較です。
- ・必要に応じて地域別に示します。

予報の根拠

- （1）前年10月の発生量は、山城、丹波、丹後で平年並の発生。
- （2）4月中旬現在、山城で平年比多く（+）、丹波、丹後で発生を認めていない（平年（例年）並）。

地域	項目	4月の調査結果	4月 平年値
山城	綴葉数(/㎡)	3.0	0.1
	幼虫数(/㎡)	0.5	0.0
	発生ほ場率(%)	22.7	3.7
丹波	綴葉数(/㎡)	0.0	0.5
	幼虫数(/㎡)	0.0	0.0
	発生ほ場率(%)	0.0	11.7
丹後	綴葉数(/㎡)	0.0	0.0
	幼虫数(/㎡)	0.0	0.0
	発生ほ場率(%)	0.0	0.0

- ・「予報の根拠」として直近の巡回調査のデータの中で主だったものを示しています。平年値も記載しているので、防除等の目安としてください。

- （3）4月中旬現在、フェロモントラップへの誘殺数は、宇治で平年比少ない（-）。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （1）幼虫で越冬し、春に羽化した成虫が発生源となるので、前年秋に多発した園では注意する。
- （2）通常、第1回目のふ化期は5月末～6月始めで、4回世代を繰り返す。
- （3）ふ化した幼虫は成長すると、葉を綴って食害するようになり、薬剤がかかりにくくなるので、ふ化直後の若齢幼虫期の防除が効果的である。

- ・「予報の根拠」は、巡回調査の結果、天候、フェロモントラップや予察灯への誘殺状況、指導機関からの情報等、「予報内容」で示した発生量や発生時期の予測の根拠となった事項を記載しています。
- ・文中の（-）、（+）は、予測される発生量に影響を及ぼすと考えられるもので、（-）の場合発生が少なくなると考えられる要因、（+）は発生量が多くなると考えられる要因を示しています。

- ・「発生生態及び防除上注意すべき事項」は、当該病害虫の生態、薬剤防除や耕種的防除方法の留意事項、要防除水準等を示しています。

※ 病害虫防除については、病害虫防除所・最寄りの農業改良普及センター又は農協にご相談ください。

IV 短期暴露評価の実施に伴う農薬の変更登録について

農薬の登録にあたっては、これまで、残留農薬の摂取量について、一日摂取許容量(ADI)を超えなければ食品安全上問題ないものと判断されてきましたが、今般、急性参照用量(ARfD)を超えないかという点についても評価されること(短期暴露評価)となりました。

今後、現在登録を受けている農薬について、順次、急性参照用量が設定されるとともに、短期暴露評価が実施されることとなります。

この結果、登録内容が変更される場合、変更登録が申請された段階で、農薬メーカーから変更登録の内容(商品名、変更事項等)が発表されます。これらの農薬は変更登録の前であっても、変更後の使用方法に基づいて使用するようになります。

(ご注意)

本内容は、国(農林水産省等)や農薬メーカーからの情報を府民の皆さまにお伝えするために掲載しています。したがって、掲載するまでに時間がかかることがあります。

1 最新の使用基準を確認して使用していただきたい農薬

※ラベルどおりに使用すると問題となることがあるため、最新の使用基準を各農薬メーカーのホームページ等で確認してください。

有効成分 (変更年月日)	主な商品名	変更内容※
アセフェート (平成26年11月17日)	オルトラン水和剤、オルトラン粒剤、オルトランDX粒剤、 ジェイエース水溶剤、ジェイエース粒剤、 スミフェート水溶剤、スミフェート粒剤、 ジェネレート水溶剤、ジェネレート粒剤	適用作物削除 適用時期変更 適用回数変更 希釈倍率変更
カルボスルファン ベンフラカルブ (平成27年7月8日)	アドバンテージ粒剤、アドバンテージS粒剤、 ジャッジ箱粒剤、オンコルOK粒剤、オンコルスタークル粒剤、 オンコルマイクロカプセル、オンコル粒剤1、 ホームガーデン粒剤、オンコル粒剤5、 オンダイアエース粒剤、ガーデンホスピタル粒剤、 グランドオンコル粒剤、ガゼット粒剤	適用作物削除

2 今回の制度の導入により使用基準の変更があった農薬

※ラベルどおり使用していただければ問題ありません。

有効成分 (変更年月日)	主な商品名	変更内容※
ジメエート (平成27年2月4日)	ジメエート乳剤、ジメエート粒剤 ベジホン乳剤	適用作物削除
フルバリネート (平成27年2月18日)	マブリック水和剤20、マブリックEW マブリックジェット	適用作物削除 使用時期変更
フェナリモル (平成27年2月18日)	ルビゲン水和剤、スペックス水和剤	適用作物削除

有効成分 (変更年月日)	主な商品名	変更内容※
NAC (平成27年2月18日)	マイクロデナポン水和剤85 デナポン水和剤50	適用作物削除
シハロトリン (平成27年10月14日)	サイハロン水和剤、サイハロン乳剤、 ビリーブ水和剤	適用作物削除
メタフルミゾン (平成27年11月25日)	アクセルフロアブル	使用時期変更
ピリダベン (平成28年10月19日)	サンマイトフロアブル、サンマイト水和剤	適用作物削除 使用時期変更 使用回数変更
イプロジオン (平成28年4月20日)	ロブラール水和剤、ロブラール500アクア	適用作物削除 希釈倍数変更
ジラム (平成28年4月27日)	コニファー水和剤	適用作物削除
チオジカルブ (平成28年11月2日)	ラービフロアブル、ラービン水和剤75	適用作物削除 使用時期変更 使用回数変更
クロルフェナピル (平成28年11月30日)	コテツフロアブル	適用作物削除 使用時期変更

※ 変更の詳細については下記の農薬工業会のサイトにて確認することができます。
(要登録) また、上記の有効成分の農薬を使用されている方は使用方法をご確認の上、使用していただきますようお願いいたします。

○ 参 考

厚生労働省(急性参照用量(ARfD))を考慮した食品中の残留農薬基準の設定について)
<http://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-11121000-Iyakushokuhinkyoku-Soumuka/0000040984.pdf> (外部リンク)

<http://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-11121000-Iyakushokuhinkyoku-Soumuka/0000040985.pdf> (外部リンク)

農林水産省農薬コーナー(農薬に関する施策関係)
<http://www.maff.go.jp/j/nouyaku/> (外部リンク)

独立行政法人農林水産消費安全技術センター(農薬登録情報の検索)
<http://www.acis.famic.go.jp/searchF/vtllm000.html> (外部リンク)

農薬工業会(使用制限にかかわる登録変更)
http://jcpa-seigen.jp/?page_id=5&reauth=1 (外部リンク)

詳しくは、京都府農林水産部食の安心・安全推進課のウェブサイト
(<http://www.pref.kyoto.jp/shokuanzenbosai/news/documents/tankibakurohyoka.html>) をご参照願います。

※病虫害防除については、病虫害防除所・最寄りの農業改良普及センター又は農協にご相談ください。

詳しい農薬情報は、農林水産省ホームページの「農薬コーナー」の「農薬情報」をご覧ください。
ホームページアドレス http://www.maff.go.jp/j/nouyaku/n_info/index.html

農業改良普及センター 電話番号一覧		
・京都乙訓	農業改良普及センター	075-315-2906
・山城北	農業改良普及センター	0774-62-8686
・山城南	農業改良普及センター	0774-72-0237
・南丹	農業改良普及センター	0771-62-0665
・中丹東	農業改良普及センター	0773-42-2255
・中丹西	農業改良普及センター	0773-22-4901
・丹後	農業改良普及センター	0772-62-4308

農作物病虫害情報サービス

ホームページアドレス
<http://www.pref.kyoto.jp/byogai/>

京都府病虫害防除所

〒621-0806 京都府亀岡市余部町和久成9
TEL 0771-23-9512
FAX 0771-23-6539

－農薬の使用にあたっては使用基準を遵守すること－